短期大学の卒業生調査から見えてくる工業系 その他の学科分野の卒業生による短大評価

Evaluation of Junior Colleges by Graduates in Technology and Other Majors by
Means of a Survey of Their Junior Colleges

石 原 好 宏^{*1}
Yoshihiro ISHIHARA

In order for junior colleges in Japan to survive, timely and appropriate measures for reforming higher education must be implemented. Therefore, in search of some key factors to improving or reforming our colleges successfully, we took a survey of alumni from 14 junior colleges in Japan by sending 12,116 of them questionnaires on how they have accepted and/or evaluated their educations at their Alma Maters, their jobs and lives after graduation. This paper describes several interesting results we have obtained by analyzing the answers from 2,835 alumni to the questionnaires. That is to say, we have found several common and individual trends and/or features in the responses from graduates in technology and other majors. From these responses, we have tried to search for some hints to a better education at junior colleges.

Keywords : Evaluation of Education, Junior College, Evaluation of Classes, Questionnaire, Evaluation by Alumni

キーワード：教育評価，短期大学，授業評価，アンケート，卒業生評価

1. まえがき

近年，我が国では高等教育の大衆化が急速に進行する中，教育の改善と改革は喫緊の課題として取り上げられ，様々な取組みが行われている．特に四年制大学と専門学校の狭間に置かれた短期大学（以下，短大）では，改善や改革の必要性和緊急性が特に高い．我々の調査研究グループ“短期大学の将来構想に関する研究会”（以下，CC研．事務局は長崎短期大学内）もそうした危機感の中で発足した．因みに，CC研は北部九州地区の短大8校と教育社会学の研究者たちが相集って2002年9月に発足し，今日に至るまで様々な調査・研究・研修の活動を続けている．

しかし，こうした改善や改革が意図どおりの成果を挙げるためには，十分な根拠に基づく地道な努力が不可欠である．そこでCC研では，短大の卒業生たちが受けた教育をどう評価し，卒業後の生活をどう受け止めているかを詳細に調べることが喫緊の課題であると考えて，この数年間，様々な調査研究を続けてきた^{1), 2)}．

本論文では，そうした活動の一環として卒業生調査を実施し，その回答を分析して検討した結果の一部を報告する．この調査では，卒業生が受けた教育の中身

と，それが卒業後の仕事でどう役立っているかなど，細かい評価をお願いした．その回答を注意深く分析すると，工業系とその他の学科分野の間には，共通の傾向や特徴が見られる一方で，工業系に特有の傾向や特徴があることも分かってきた．こうした事項を整理して，短大の改善・改革への手がかりを模索する．

2. 卒業生調査の枠組みと調査対象

今回の調査は，2004年春の第1回目に続く第2回目として実施した．その規模は，北部九州地区の幹事校8短大に，全国から6短大（北海道地区1校，関西地区2校，中国地区2校，福岡地区1校）が加わった全14短大であった．そして，この調査は，2005年夏から秋にかけて，卒業後2年目・4年目・8年目の全卒業生に母校から調査票（全12ページ）を郵送し，回答を返送してもらう方式で実施した．なお，調査票を郵送した卒業生の総数は12,116人で，2,835人から回答が届

表1 卒業生が学んだ学科分野

人文	教養	工業	家政	教育	芸術	その他	不明	合計
503	60	171	948	929	91	51	82	2835
17.7	2.1	6.0	33.4	32.8	3.2	1.8	2.9	100.0

注) 数字の欄の上段は度数(人数)で，下段はその人数の合計に対する割合(%)である．

平成19年3月26日受付

※1 福岡工業大学短期大学部

表2 卒業後の経過年数

卒業後の年数	度数(人)	割合(%)
2年目	898	31.7
4年目	916	32.3
8年目	997	35.2
不明	24	0.8
合計	2835	100.0

けられた(回収率23.4%)。また、今回“工業系”とした短大はすべて、情報系の学科だけを設置していた。

ここで、今回の調査に応じてくれた卒業生たちの学科分野の分布を表1に示し、卒業後の経過年数を表2に示す。表1から、学科分野では家政系と教育系が共に全体の30%を超えて拮抗し、両者の合計が全体の約65%を占めていることが分かる。

3. 卒業直後の進路状況と短大評価

ここで、短大卒業生の卒業直後の進路をまず確認する。そして卒業生たちは、母校で受けた教育が仕事でどの程度役立ったと考えているか、また母校の教育をどう評価しているかを検討する³⁾。これらの検討は、4つに大分類される全13項目の観点毎に卒業生が5段階評価してくれた回答の分析結果に基づいて行う。

最初に卒業生たちが卒業直後に選んだ進路を学科分野別にまとめた表3を示す。

この表から次のような特徴が見えてくる。ここで“就職率”とは“就職を進路として選んだ人数の、同じ学科分野の卒業生総数に対する割合”を意味し、“就職”はフルタイムとパートタイムの両方を含む。さらに、“進学率”とは“進学を進路として選んだ人数の、同じ学科分野の卒業生総数に対する割合”を意味する。

1) 四年制大学への進学率は工業系が最高で、回答

表3 卒業直後の進路

学科分野	就職		進学						合計
	フルタイム	パートタイム	短大専攻科	四年制大学	専門学校	家事・子育て	その他	無回答	
人文	326	68	9	52	14	2	22	10	503
	64.8	13.5	1.8	10.3	2.8	0.4	4.4	2.0	100.0
教養	47	6	1	4	0	0	2	0	60
	78.3	10.0	1.7	6.7	0.0	0.0	3.3	0.0	100.0
工業	112	19	0	27	3	2	6	2	171
	65.5	11.1	0.0	15.8	1.8	1.2	3.5	1.2	100.0
家政	706	115	25	32	24	6	34	6	948
	74.5	12.1	2.6	3.4	2.5	0.6	3.6	0.6	100.0
教育	705	153	26	15	3	6	11	10	929
	75.9	16.5	2.8	1.6	0.3	0.6	1.2	1.1	100.0
芸術	53	12	9	4	5	1	6	1	91
	58.2	13.2	9.9	4.4	5.5	1.1	6.6	1.1	100.0
その他	41	3	0	0	3	0	3	1	51
	80.4	5.9	0.0	0.0	5.9	0.0	5.9	2.0	100.0
合計	1990	376	70	134	52	17	84	30	2753
	72.3	13.7	2.5	4.9	1.9	0.6	3.1	1.1	100.0

注) 表中、各欄の上段は度数(人数)を表し、下段は各学科分野における百分率を表す。また、網掛けをした数値は各列における最高値を示す。

数171人中27人、15.8%であった。なお、四年制大学への進学率の次点は人文系で、回答数503人中52人、10.3%であった。

2) その裏返しで、工業系の就職率はごく低く、下から2番目(回答数171人中131人、76.6%)であった。なお、就職率の最高は教育系で、回答数929人中858人、92.5%であった。

3) 就職率の最低は芸術系で、回答数91人中65人、71.4%であった。

ここで、進路として就職を選んだ全卒業生数が全体の86.3%に達したことは、短大が何とかその使命を果たしている証拠と言えよう。そうした中で、教育系の就職率が92.5%、家政系のそれが86.6%と極めて高いのは、卒業時に国家資格(保育士、栄養士など)を取得できることが大きく寄与していると思う。

その一方で、工業系の就職率が教養系や人文系より一段と低いことは理解し難いかも知れない。しかし、今回の調査に参加した工業系短大の場合、身に付けた知識や技術だけで直ちに専門技術職に就くことは難しいのが実状である。このことは表4からも推測できよう。つまり、工業系では情報処理技術者としての就職が10.5%と低い一方で、一般事務職への就職は15.8%と約1.5倍に近い。この点は、卒業時に国家資格が取得できる教育系で幼稚園教員への就職が21.5%で、保育所保育士への就職が39.3%と極めて高率であることと

表4 卒業直後の職業

職業	学 科 分 野							合計
	人文	教養	工業	家政	教育	芸術	その他	
教員(幼稚園)	2	0	0	5	200	1	0	208
	0.4			0.5	21.5	1.1		
保育士(保育所)	0	0	0	3	365	0	0	368
				0.3	39.3			
保育士(施設)	0	0	0	3	32	0	0	35
				0.3	3.4			
介護福祉士	0	0	0	82	17	1	0	100
				8.6	1.8	1.1		
栄養士	0	0	0	186	0	0	0	186
				19.6				
情報処理技術者	5	0	18	1	0	0	0	24
	1.0		10.5	0.1				
その他専門技術的職業	4	0	5	45	4	11	2	71
	0.8		2.9	4.7	0.4	12.1	3.9	
一般事務	130	11	27	85	15	6	23	297
	25.8	18.3	15.8	9.0	1.6	6.6	45.1	
会計事務	25	11	11	19	1	1	5	73
	5.0	18.3	6.4	2.0	0.1	1.1	9.8	
医療事務	5	1	11	34	5	0	1	57
	1.0	1.7	6.4	3.6	0.5		2.0	
小売・卸売り店員	9	6	7	63	7	4	1	97
	1.8	10.0	4.1	6.6	0.8	4.4	2.0	
調理師	0	0	0	20	0	0	0	20
				2.1				
接客業	25	3	2	39	4	2	1	76
	5.0	5.0	1.2	4.1	0.4	2.2	2.0	
金融業	10	1	1	5	0	1	2	20
	2.0	1.7	0.6	0.5		1.1	3.9	
全体合計	503	60	171	948	929	91	51	2753
	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	

注) 表中、各欄の上段は度数(人数)を、下段は全体合計に対するその職業の割合(%)を表す。なお、度数が0の割合は、記入を省いた。また、職業は2桁以上の度数が含まれるものだけを抜き出した。各学科分野に特徴的な就職先に網掛けをした。

表5 卒業生の短大評価

評価項目	充 実 度								満 足 度							
	学 科 分 野							全体	学 科 分 野							全体
	人文	教養	工業	家政	教育	芸術	その他		人文	教養	工業	家政	教育	芸術	その他	
A-a) 選択できる授業の多様性	3.81	3.61	3.55	3.47	3.66	3.34	3.36	3.60	3.64	3.43	3.38	3.40	3.60	3.24	3.19	3.50
A-b) カリキュラムの体系的性 — 全体的なまとまり	3.82	3.43	3.37	3.46	3.64	3.32	3.24	3.57	3.66	3.35	3.26	3.34	3.51	3.20	3.07	3.44
A-c) 卒業論文や卒業研究の 位置づけ	3.33	3.11	3.06	3.32	3.47	3.23	2.73	3.33	3.33	3.19	2.95	3.29	3.50	3.12	2.92	3.32
B-d) 豊かな教養を身につける授業	3.89	3.66	3.28	3.47	3.70	3.24	3.42	3.60	3.76	3.59	3.21	3.36	3.61	3.13	3.38	3.50
B-e) 専門的な知識や技術を 身につける授業	3.74	3.27	3.76	3.94	4.08	3.84	3.42	3.90	3.56	2.98	3.52	3.73	3.90	3.64	3.24	3.71
B-f) 実践で役立つ実学性 重視の授業	3.50	3.09	3.42	3.56	3.85	3.25	3.51	3.61	3.37	2.89	3.31	3.43	3.72	3.11	3.43	3.48
B-g) 授業方法に工夫がある 授業	3.67	3.45	2.99	3.18	3.46	2.98	2.82	3.34	3.55	3.37	2.91	3.09	3.37	2.90	2.76	3.24
B-h) 学生から質問する機会 が多い授業	3.67	3.07	2.65	2.89	3.05	2.75	2.49	3.05	3.51	3.06	2.70	2.91	3.06	2.83	2.57	3.04
C-i) 就職・進路指導の体制 や実習の機会	3.59	3.54	3.29	3.40	3.89	2.57	3.36	3.56	3.35	3.46	3.13	3.22	3.75	2.37	3.05	3.39
C-j) 進路や悩みなどを気軽に 相談できる体制	3.44	3.55	3.16	3.23	3.65	2.55	2.84	3.38	3.27	3.46	3.03	3.12	3.58	2.46	2.62	3.28
C-k) 図書館・LL、PCなどの 学習環境	3.97	4.20	3.73	3.44	3.65	3.49	3.47	3.65	3.83	4.19	3.55	3.36	3.51	3.34	3.33	3.53
D-l) 授業以外で教員と接触 する機会	3.51	3.80	3.25	3.36	3.61	3.01	2.58	3.45	3.46	3.78	3.28	3.38	3.63	3.17	2.55	3.46
D-m) 学生同士の交流の機会	3.92	3.66	3.46	3.71	3.88	3.60	3.27	3.77	3.81	3.67	3.53	3.69	3.86	3.61	3.26	3.75

注) 各欄の数値は評価点の平均で、値が大きいほど評価は高い。網掛けは2点台の、下線は4点台の数値に付けた。なお、「全体」は全データから直接求めた平均値であって、行方向の単純平均ではない。

表6 短大で学んだ知識・技能等の職場での役立ち度

	評価点	卒業後最初の仕事で (E1-a)							現在の仕事で (E1-b)						
		1	2	3	4	5	合計	評価平均	1	2	3	4	5	合計	評価平均
人文	2年目	28	25	25	24	13	115	2.73	25	23	28	15	17	108	2.78
	4年目	26	29	37	24	14	130	2.78	23	28	38	25	18	132	2.90
	8年目	54	35	42	37	17	185	2.61	45	35	44	34	21	179	2.73
	合計	108	89	104	85	44	430	2.69	93	86	110	74	56	419	2.79
教養	2年目	0	2	7	1	0	10	2.90	0	1	6	0	0	7	2.86
	4年目	5	2	4	1	0	12	2.08	5	1	2	3	0	11	2.27
	8年目	5	10	15	4	0	34	2.53	3	7	17	5	3	35	2.94
	合計	10	14	26	6	0	56	2.50	8	9	25	8	3	53	2.79
工業	2年目	3	3	9	8	8	31	3.48	2	3	8	8	7	28	3.54
	4年目	13	6	14	15	11	59	3.08	10	7	15	16	9	57	3.12
	8年目	11	7	9	21	10	58	3.21	9	8	7	21	12	57	3.33
	合計	27	16	32	44	29	148	3.22	21	18	30	45	28	142	3.29
家政	2年目	16	21	55	66	93	251	3.79	23	26	46	54	74	223	3.58
	4年目	41	31	68	78	91	309	3.48	46	30	69	72	76	293	3.35
	8年目	60	47	67	67	88	329	3.23	65	46	69	68	65	313	3.07
	合計	117	99	190	211	272	889	3.47	134	102	184	194	215	829	3.31
教育	2年目	11	11	41	98	168	329	4.22	13	10	42	87	144	296	4.15
	4年目	6	10	39	80	160	295	4.28	11	16	35	62	138	262	4.15
	8年目	24	8	31	57	146	266	4.10	25	15	37	51	127	255	3.94
	合計	41	29	111	235	474	890	4.20	49	41	114	200	409	813	4.08
芸術	2年目	4	2	6	3	11	26	3.58	4	2	4	4	9	23	3.52
	4年目	10	4	4	2	7	27	2.70	8	3	5	2	10	28	3.11
	8年目	6	2	1	9	12	30	3.63	4	2	1	11	10	28	3.75
	合計	20	8	11	14	30	83	3.31	16	7	10	17	29	79	3.46
その他	2年目	0	2	2	2	0	6	3.00	1	0	1	1	0	3	2.67
	4年目	0	0	0	3	4	7	4.57	0	0	1	2	3	6	4.33
	8年目	4	5	9	15	3	36	3.22	3	5	9	12	3	32	3.22
	合計	4	7	11	20	7	49	3.39	4	5	11	15	6	41	3.34
総計		327	262	485	615	856	2545	3.55	325	268	484	553	746	2376	3.47

注) 5段階評価の各得点の度数を示した。なお、評価平均は経過年別の相加平均を、網掛けのマークは当該経過年の中でベスト2以内の数字を表す。また、学科分野別の相加平均が最高の数字には下線を付けた。

好対照をなしている。

次に、短大の卒業生が母校で受けた教育をどう評価しているかを表5にまとめた。評価項目は4つの大分類にまたがる全13項目である。各項目について、(1) 充実していたか、(2) どの程度満足したか、を5段階評価してもらった。なお、「非常に充実していた／非常に満足した」は5とし、「まったく充実していなかった／まったく満足しなかった」は1とするようお願いした。

この表から見てくる特徴を次に列挙する。

- 1) 短大全体への評価は、充実度・満足度とも全評価項目で3点を上回り、まず問題はない。しかし、工業系の充実度はB-g)とB-h)が2点台、満足度でもA-c)・B-g)・B-h)が2点台と極めて低い。これらは「卒業論文や卒業研究の位置づけ」「授業方法に工夫があるか」「学生が質問する機会は多いか」など教育の根幹をなす項目である。これについては適切で早急な対応が必要である。
- 2) 各項目の評価を充実度と満足度の間で対比すると、D-l)「授業以外で教員と接触する機会」の評価だけは後者が僅かに高く(0.1点)、それ以外ではすべて前者が高い。これは、多方面の充実は認めるが満足はしない、という意思表示だろうか。
- 3) 工業系は充実度で2項目、満足度で3項目が2点台であったが、人文系と教育系は充実度・満足度とも全項目で3点台以上の評価であった。
- 4) 工業系で3点台の評価を得た項目の中、A-c)「卒業論文や卒業研究の位置づけ」の充実度3.06点とC-j)「進路や悩みなどを気軽に相談できる体制」の満足度3.03点は特に低い。こうした項目に対する一層の見直しも欠かせない。

4. 短大在学中に獲得した能力とその適切性

本章では、卒業生が短大在学中に獲得したと考える能力の程度とそれらの職場での必要度を卒業生自身に評価してもらった結果を基にして短大教育の適切性を考える。ここで「適切性」とは、「知識・技能等について、卒業生が短大在学中に獲得したと考える程度とその職場での必要度との差が小さく、かつその評価が高いこと」と仮定する。

4.1 短大で身に付けた知識・技能等の役立ち度

ここでは、短大卒業後の最初の仕事E1_aと現在（あるいは一番最近）の仕事E1_bで、卒業生が在学中に獲得した知識や技能等の役立ち度を5段階評価した結果を基に検討を行う。ただし、知識や技能等の中身は特に問わず、全体的な印象による回答をお願いした。その結果は、学科分野別と経過年数別に点数毎の度数で表し、経過年数毎の平均を添えて表6にまとめた。

この表で点数毎の度数を用いたのは、次のような判断に基づく。つまり、調査の回答数が学科分野間で大

きく異なるので、役立ち度は、平均点や標準偏差で示すより、点数毎の度数と平均点で示す方が背景を掴みやすいと考えたのである。表6から次のような特徴が見えてくる。

- 1) 短大全体の役立ち度は、最初の仕事より現在の仕事で若干下がる(3.55 → 3.47)。
- 2) 学科分野間ではかなり明確な違いが見られる。人文系と教養系では点数の平均が卒業後の経過年数別・全体ともすべて2点台である。しかし、教育系だけは、母数が800を超える大集団ながら、E1_bの8年目(母数255)が3.94である以外は、すべて4点台である。そして、教育系の全体の評価は4.20(E1_a, 母数890)／4.08(E1_b, 母数813)と極めて高い。
- 3) 役立ち度を卒業後の経年順(2 → 4 → 8年目)で見ると、3つのパターンがある。4年目に一旦下がるが、その後上がる型(教養系・工業系・芸術系のE1_aとE1_b)、4年目に一旦上がるが、その後下がる型(人文系・その他のE1_aとE1_b, 教育系のE1_a)、及び単調に下がる型(家政系のE1_aとE1_b, 教育系のE1_b)である。
- 4) E1_aよりE1_bで役立ち度が上がるのは、人文系(2.69 → 2.79)、教養系(2.50 → 2.79)、工業系(3.22 → 3.29)、芸術系(3.31 → 3.46)の4つの学科分野で、役立ち度が下がるのは家政系(3.47 → 3.31)、教育系(4.20 → 4.08)、その他(3.39 → 3.34)の3つの

表7 在学中に身に付けた知識・技能等の程度と現職での必要度(経年変化)

知識・技能等の種類	2年目	4年目	8年目	合計
a. 幅広い知識・教養	3.26 → 3.90 811 → 784	3.25 → 3.95 888 → 674	3.11 → 3.91 975 → 963	3.20 → 3.92 2674 → 2621
b. 専門的な知識や技能	3.45 → 3.91 808 → 783	3.38 → 3.86 886 → 873	3.14 → 3.70 972 → 959	3.31 → 3.82 2566 → 2615
c. 外国語の能力	2.16 → 1.96 806 → 779	2.07 → 1.99 884 → 869	2.01 → 2.01 975 → 963	2.07 → 1.99 2665 → 2611
d. コンピュータを使いこなす技能	2.99 → 3.12 807 → 779	2.95 → 3.34 884 → 874	2.60 → 3.52 974 → 966	2.84 → 3.34 2665 → 2619
e. 問題解決能力	3.04 → 3.86 804 → 777	3.00 → 3.98 881 → 870	2.88 → 3.99 974 → 965	2.97 → 3.96 2659 → 2612
f. ひとりで仕事をこなせる力	3.17 → 4.14 805 → 782	3.18 → 4.22 887 → 876	3.01 → 4.20 975 → 964	3.11 → 4.19 2667 → 2622
g. チームの中で仕事を遂行する能力	3.40 → 4.20 807 → 782	3.32 → 4.23 888 → 876	3.20 → 4.22 974 → 965	3.30 → 4.22 2669 → 2623
h. 仕事への適応能力	3.32 → 4.32 808 → 783	3.31 → 4.31 888 → 872	3.16 → 4.31 973 → 962	3.26 → 4.31 2669 → 2617
i. 創造性	3.23 → 3.70 807 → 784	3.12 → 3.69 887 → 876	2.96 → 3.63 975 → 966	3.09 → 3.67 2669 → 2626
j. 自発性・自主性	3.37 → 4.10 807 → 783	3.25 → 4.10 888 → 875	3.16 → 4.06 974 → 965	3.25 → 4.09 2669 → 2623
k. コミュニケーション能力	3.65 → 4.36 807 → 783	3.50 → 4.34 888 → 875	3.42 → 4.34 975 → 968	3.51 → 4.35 2670 → 2626
l. リーダーシップを発揮できる力量	2.94 → 3.55 806 → 780	2.89 → 3.59 889 → 874	2.77 → 3.56 973 → 966	2.86 → 3.56 2668 → 2620
m. 人との交渉能力、折衝能力	3.17 → 3.97 805 → 780	3.07 → 3.99 888 → 875	2.90 → 4.00 976 → 964	3.04 → 3.99 2669 → 2619
n. 礼儀・マナー	3.63 → 4.52 808 → 783	3.59 → 4.50 889 → 875	3.46 → 4.50 974 → 966	3.55 → 4.50 2671 → 2624

注1) 数値が入った各セルの上段“ $\alpha \rightarrow \beta$ ”は、 α が在学中に身に付けたと考える程度(5点法)の平均点、 β は卒業後の職場でその知識・技能を必要と感じた程度(5点法)の平均点である。下段の“ $\gamma \rightarrow \delta$ ”は、 γ と δ がそれぞれ α 、 β と評価した人の数。

注2) 網掛けをした欄は、 β の値が4.0以上のときに付けた。また、下線を付けた欄では、上記以外で β が α と比べて1.0ポイント以上数値が伸びた。

学科分野である。

4.2 短大で身に付けた知識・技能等の程度と、就職後のそれらの必要度

ここでは、卒業生が短大在学中に身に付けた知識・技能等の程度Abl_zaiとそれらの現在（または一番最近）の職場における必要度Abl_jobを5段階評価した結果の平均を→で結んだ組を指標として利用する。つまり、表7では、回答者全体による評価を、知識・技能等の種類別に、そして卒業後の経過年数別に、この組と度数を示す。また、表8では、学科分野別の全体による評価を、知識・技能等の種類別に、この組と度数を示す。

この2つの表から、知識・技能等の種類と学科分野間に顕著な特徴が認められる。共通の特徴は、卒業生が在学中に学ぶ14種類の知識・技能等のほぼ全部で、卒業生が在学中に身に付けたと思う程度より職場で必要性を感じる程度の方がはるかに高いことである。この事実は、卒業生たちが各職場で極めて厳しい現実と直面していることを示唆している。

ここで、表7の「合計」の列から見てくる全体的な特徴をまとめる。

- 1) 卒業後に必要度の評価が下がるのは「外国語の能力」(差: -0.08) だけであり、それ以外ではすべて評価が上がっている。その中で、「ひとりで仕事をこなせる力」(差: +1.08), 「仕事

への適応能力」(差: +1.05), 「問題解決能力」(差: +0.99), 「人との交渉能力・折衝能力」(差: +0.95), 及び「礼儀・マナー」(差: +0.95) 等では上がり幅が極めて大きい。

- 2) 1) に挙げた項目以外で、就職後に高い必要性を感じた(評価が4.0以上の)項目は、網掛けした「礼儀・マナー」(4.50), 「コミュニケーション能力」(4.35), 「仕事への適応能力」(4.31), 「チームの中で仕事を遂行する能力」(4.22) 等である。

さらに、表7の全体から見てくる評価の特徴を幾つか挙げておく。

- 1) 網掛けした6項目は、どの経過年数でも、現職での必要度が4.00以上となっている。それ以外では、2) で指摘した2項目を除いて、すべて3点台後半であり、卒業生たちが職場で必要な能力の高さを痛感していることが窺われる。
- 2) 「外国語の能力」は、卒業後の経過年数に関係なく、現職での必要度が2.00前後と低い。それともう一件、現職での必要度が予想より低かったのは「コンピュータを使いこなす技能」であり、8年目の卒業生が3.52とした以外は、すべて3点台前半の3.12 ~ 3.34であった。

最後に、表8に示した短大全体と学科分野別のデータから見てくる特徴を簡単に列挙しておく。

- 1) 各項目を学科分野別(行方向)に見た特徴: 全

表8 在学中に身に付けた知識・技能等の程度と現職での必要度(学科分野別)

知識・技能等の種類	人文	教養	工業	家政	教育	芸術	その他	合計
a. 幅広い知識・教養	3.14 → 3.73 456 → 448	3.00 → 3.76 59 → 58	3.09 → 3.69 152 → 147	3.15 → 3.84 912 → 890	3.31 → 4.19 900 → 886	3.14 → 3.83 86 → 83	3.18 → 3.67 49 → 49	3.20 → 3.93 2614 → 2561
b. 専門的な知識や技能	2.91 → 3.32 455 → 445	2.71 → 3.16 58 → 58	3.17 → 3.34 152 → 146	3.31 → 3.75 907 → 888	3.59 → 4.30 899 → 886	3.57 → 3.87 86 → 83	2.92 → 3.35 49 → 49	3.32 → 3.83 2606 → 2555
c. 外国語の能力	3.19 → 2.63 459 → 449	2.81 → 2.64 59 → 58	1.94 → 1.95 151 → 145	1.75 → 1.80 905 → 884	1.82 → 1.84 896 → 882	1.85 → 1.98 86 → 84	2.12 → 1.94 49 → 49	2.07 → 1.99 2605 → 2551
d. コンピュータを使いこなす技能	3.02 → 3.89 457 → 449	3.05 → 3.75 58 → 59	3.79 → 3.79 151 → 147	2.94 → 3.45 909 → 891	2.41 → 2.81 896 → 881	2.70 → 3.16 85 → 83	3.45 → 4.04 49 → 49	2.83 → 3.33 2605 → 2559
e. 問題解決能力	3.16 → 4.05 454 → 446	2.90 → 3.86 58 → 58	3.01 → 3.73 149 → 145	2.89 → 3.87 908 → 891	2.96 → 4.04 895 → 879	2.79 → 3.96 86 → 84	2.80 → 3.82 49 → 49	2.96 → 3.95 2599 → 2552
f. ひとりで仕事をこなせる力	3.21 → 4.23 458 → 446	3.16 → 4.14 58 → 59	3.15 → 4.01 151 → 147	3.10 → 4.19 907 → 891	3.08 → 4.20 898 → 886	2.93 → 4.24 86 → 84	3.02 → 4.20 49 → 49	3.11 → 4.19 2607 → 2562
g. チームの中で仕事を遂行する能力	3.34 → 4.15 457 → 446	3.21 → 4.05 58 → 58	3.13 → 3.95 151 → 146	3.29 → 4.20 909 → 893	3.36 → 4.38 899 → 887	2.95 → 3.86 86 → 84	3.22 → 4.04 49 → 49	3.30 → 4.22 2609 → 2563
h. 仕事への適応能力	3.20 → 4.31 454 → 446	3.17 → 4.00 58 → 57	3.07 → 3.99 150 → 147	3.21 → 4.27 912 → 892	3.39 → 4.45 900 → 884	3.10 → 4.31 80 → 83	3.08 → 4.19 49 → 48	3.26 → 4.32 2609 → 2557
i. 創造性	3.01 → 3.22 456 → 448	2.80 → 3.22 58 → 58	2.76 → 3.11 151 → 147	3.00 → 3.54 912 → 893	3.33 → 4.16 897 → 887	3.26 → 4.11 86 → 84	2.63 → 3.10 49 → 49	3.10 → 3.68 2609 → 2566
j. 自発性・自主性	3.38 → 3.90 457 → 447	3.21 → 3.83 58 → 58	2.98 → 3.63 150 → 146	3.13 → 4.01 912 → 894	3.37 → 4.36 897 → 885	3.36 → 4.24 86 → 84	3.06 → 4.00 49 → 49	3.27 → 4.09 2609 → 2563
k. コミュニケーション能力	3.63 → 4.30 457 → 448	3.56 → 4.12 57 → 58	3.37 → 4.00 150 → 146	3.45 → 4.33 911 → 894	3.56 → 4.47 900 → 887	3.33 → 4.43 86 → 84	3.57 → 4.18 49 → 49	3.52 → 4.35 2610 → 2566
l. リーダーシップを発揮できる力量	2.91 → 3.20 457 → 446	2.63 → 3.38 57 → 58	2.68 → 3.08 151 → 146	2.77 → 3.55 908 → 892	2.98 → 3.88 900 → 885	2.77 → 3.71 86 → 84	2.88 → 3.22 49 → 49	2.86 → 3.57 2608 → 2560
m. 人との交渉能力, 折衝能力	3.07 → 3.95 456 → 446	2.74 → 3.78 58 → 58	2.83 → 3.66 151 → 147	3.00 → 3.94 913 → 892	3.13 → 4.13 897 → 883	3.04 → 4.13 85 → 84	2.86 → 3.80 49 → 49	3.04 → 3.99 2609 → 2559
n. 礼儀・マナー	3.47 → 4.45 456 → 447	3.71 → 4.55 58 → 58	3.41 → 4.30 151 → 147	3.53 → 4.46 912 → 894	3.60 → 4.60 900 → 885	3.60 → 4.58 86 → 84	4.00 → 4.57 48 → 49	3.55 → 4.51 2611 → 2564

注) 表7の[注1]と[注2]を参照。

部の学科分野で、現在の職場での必要度が4.00以上であったのは「ひとりで仕事をこなせる力」「コミュニケーション能力」「礼儀・マナー」の3項目である。なお、「仕事への適応能力」については、工業系だけが3.99で、それ以外はすべて4.00以上である。

2) 各項目を知識・技能等の種類別(列方向)に見た特徴:教育系では全14項目中11項目で現在の職場での必要度が4.00以上であった。それらの中には「幅広い知識・教養」(4.19)、「専門的な知識・教養」(4.30)のように、他の学科分野には見られない項目も含まれている。

ところが、それ以外の学科分野では7~3項目が4.00以上であった。特に工業系では「ひとりで仕事をこなせる力」「コミュニケーション能力」「礼儀・マナー」の僅か3項目が4.00以上であったに過ぎない。

5. 考察

3.と4.で表3~8から見てくる特徴の概略を指摘した。ここでは、それらの背後に隠れている問題点などをごく簡単に指摘しておきたい。

まず、3で論じた表3~5に関連したことである。

(1) 工業系は四年制大学への編入率が抜群に高いにもかかわらず、母校への評価は、他と比べて充実度・満足度ともかなり低い。その原因は、日頃の教育活動がなお不十分な面と、地道な努力が学生たちによく理解されていない面があると思う。

続いて、4.1で論じた表6に関連して述べる。

(2) 短大で身に付けた知識・技能等の役立ち度は、全体的には卒業後の年数が経つと下がる傾向にある。また、卒業後の最初の仕事と現在の仕事では後者が下がっている。これは、回答数の約70%を占める家政系と教育系の影響である。その中で工業系では、卒業後の経年変化が全体の傾向とあまり変わらない。しかし、卒業後の最初の仕事と現在の仕事では、後者でやや上がっている。

これは、仕事上の経験を積んでいくと、短大時代に培った基礎力が次第に効果を現してくるからであろうか。

最後に4.2で論じた表7~8について述べる。

(3) 企業からは、学科分野に関係なく、それぞれの高い専門性を裏付ける知識・技能等よりも、一般社会人としての基礎能力、そして企業や他人の中で強調しながら適切に仕事をこなしていく能力、つまり人間力、が期待されていると言える。

なお、本研究におけるアンケート調査結果の分析処理には、統計解析ソフトSPSSの13.0版を利用したことをお断りしておく。

6. あとがき

この度の卒業生調査の分析結果から、工業系短大には、他の教育分野とも共通した問題点がある一方で、工業系特有の問題もあることが程度明確になったと言える。したがって、前者については今後とも短大間の相互協力の下に、問題解決の方策を探り、実践を重ねていくことが肝要である。それと共に、工業系に特有の問題点は、他の教育分野の実践例を参考にしつつ、現場への注意深い観察を怠らず、独自の解決策を模索する努力を重ねていくことが大切である。

確かに今は少子化の進行によって、周囲の学校はすべて競争相手である。しかし、そのためにお互いの連携を狭めていくのでは、豊かな実りは期待できない。この点は、この度の20人を超える科研費補助金による研究チームで進めてきた調査研究活動を通じて学んだもう一つの貴重な教訓でもある。

謝 辞

本研究は文部科学省の平成16年度~18年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))の研究課題「短期大学卒業者のキャリア形成に関するファースト・ステージ論的研究」(課題番号:16330170)による調査研究の一環として実施した。ここに深甚の謝意を表する。

参 考 文 献

- 1) 短期大学基準協会 調査研究委員会:短大卒業生の進路・キャリア形成と短大評価,調査研究報告書,短期大学基準協会,pp.1-214,2005
- 2) 稲永由紀,白川佳子,石原好宏,安部恵美子,吉本圭一:短期大学教育と卒業生のキャリア形成-「ファーストステージ」としての短大利用/非利用に着目して-,日本高等教育学会,第9回大会講演論文集,pp.161-164,2006
- 3) 石原好宏,曾 超:工業系短大生が体感した短大教育と卒業後の進路・満足度等について-短大卒業生調査から見てくる工業系短大卒業生の短大評価-,平成18年度工学・工業教育研究講演会講演論文集,pp.424-425,2006

著 者 紹 介

石原 好宏

1968年:九州大学大学院工学研究科電子工学専攻博士課程・単位取得退学。同年:九州産業大学経営学部専任講師。その後、山口大学工業短期学部助教授等を経て、現在:福岡工業大学短期学部教授。博士(工学,九州大学)。専門分野は自然言語の機械処理等。情報処理学会,日本工業教育協会等の正会員。
連絡先:ishihara@fjct.fit.ac.jp